

劇づくりの実際

— 劇「かさじぞう」(養護学級高学年組) —

竹林地 毅

1 高学年の劇づくり

高学年の児童は、過去何度もクリスマス会や学芸会での劇発表の体験をもっており、数年前の劇のビデオを見せると、自分の台詞だけでなく、他の児童の台詞、演技等を再現したりできるほどである。特にクリスマス会は毎年、楽しい生活体験(劇づくり、かざりづくり、帽子づくり、招待状づくり、校外学習での市内めぐり等)の積み重ねの場となっており、クリスマス会が近づくと、家中の日めくりカレンダーを先にめくって待っている児童もいる。このような楽しさは、クリスマス会に向かって、学級全員が作り上げていき、母親や実習生に見てもらえることで、全力を出し切った成就感が味わえ、それをしっかり認めてもらえることから生まれてくるものであろう。

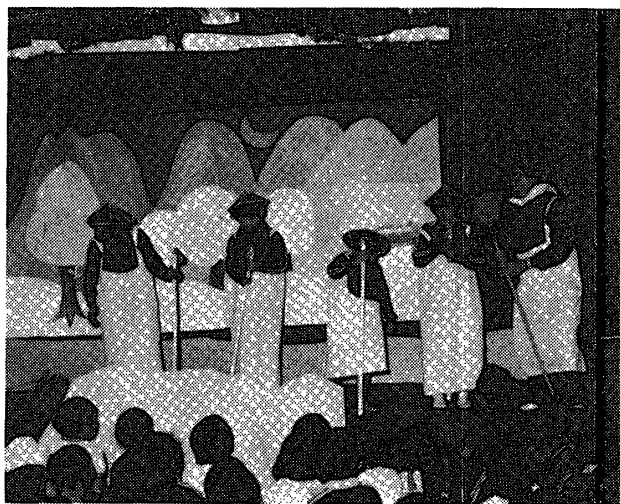
ところで、劇づくりの指導を考えるにあたり、これまでの指導をふりかえって、次のような問題点が考えられた。

- (1) 児童ひとり、ひとりが物語の学習の時に、あらすじの理解をするための動作化、操作をすることを積極的に取り入れる工夫が十分でなかった。
- (2) 表現して伝えることの楽しさを味わわせるような場として、児童同志が刺激し、まねを積極的にしていくような自由な表現の場づくりをし、演技への意欲を高める指導が十分でなかった。
- (3) 劇発表の当日に向けて、演技することへの意欲を持続させる工夫が十分でなかった。

2 題材「かさじぞう」の決定

劇の題材の決定にあたり、児童の実態と過去の演技経験の積み重ねを考えて、次の点に留意した。(次頁の表参照)

- (1) 4名のクラス全員が物語の展開を理解できるような物語であること。特に、登場人物に親しみがあり、時間的な経過がとらえやすいこと。
- (2) 発音が不明瞭なものが多い女兒^⑮が練習しているか行音が、たくさん出てくる台詞が用意しやすいこと。
- (3) 物語中に人への思いやり、人との相互理解の中で生まれる素朴な善意のやりとりが感じられる内容があること。



これらの点をふまえ、登場人物に児童たちの親しみのある昔話の中から「かさじぞう」を選んだ。昔話については、「花さかじじい」、「かぐやひめ」等、ここ数年、クリスマス会や学芸会で取り組んでおり、おじいさん、おばあさんという登場人物には親しみを持っている。又、地藏さんの寒さへの共感から、おじいさんが雪を払ってかさをかぶせる、足りない地藏さんには自分の手拭いをあげる、地藏さんがお礼にプレゼントをするというやりとりが、児童につかませやすいと考えた。

3 問題点解決の方策と指導の流れ

題材の決定後、劇づくりの学習をはじめたが、先に述べた問題点を解決するためには次のようなことを考えた。

- (1) 物語の学習において、読む、聞くだけでなく、動作化しやすい場の設定、操作できる教材・

児童の実態と配役、演技内容

児	実 態	配 役	演 技 内 容
女児 ⑬	場面と全体の流れと関連づけて理解できる。歌ったり、踊ることが好き。人前での発表を恥ずかしがる。	おばあさん (⑮と交代) じぞうさん	お茶を飲む。おじいさんをはげます。おじいさんを送り出す。地蔵になって踊り、みかんを取り出す。
男児 ⑭	場面の理解はできる。歌うことが好き。台詞を覚えて、動作に合わせて言うことができる。	おじいさん じぞうさん	お茶を飲む。歌う。かさを売る。地蔵さんの頭に雪をはらってかさをかぶせる。地蔵になって踊る。
女児 ⑮	場面を全体の流れと関連づけて理解できる。発音は不明瞭だが、自分で考えた動作で演技することができる。	おばあさん おさむらい じぞうさん	かさをことわる。地蔵になって踊り、酒を取り出す。荷物引っぱって歩く。おじいさんを呼ぶ。
女児 ⑯	場面の理解はできるが、全体の流れと関連づけて理解することはむずかしい。他の児童の動きをまねて演技することができる。	むすめ じぞうさん	お茶をいれてすすめる。地蔵になって踊り、もちを取り出す。荷物を引っぱって歩く。

教具を使用をする。

紙芝居を見るだけでなく、必ず動作化できる場を毎時間つくることで、あらすじの理解をたすけ、登場人物への認識も深まってゆくだろう。又、ペープサートを操作するだけでなく、かさ、びん等の小道具の実物を使用することで簡単な劇あそびを積み重ね、劇中の演技につなげていくことができるだろう。

(2) 指導者のペープサート劇、実際の演技を見たあと児童の活動を入れる。

児童にとって生きた教材とも言える指導者の見本動作は、児童の活動への意欲を喚起し、高めるであろう。そのつど、しっかり賞賛し続けることで表現することの楽しさを味わわせることもできると考える。

(3) 見せ場づくりを児童といっしょにする。

少々ストーリーは変わっても、ひとり、ひとりの児童が得意なことを劇の中に取り入れることは例年してきたが、特に音楽を伴った踊りは好きなようである。又、それが見せ場にもなっている。踊りを児童と活動しその中で考え、児童が考えた動きを入れることで、自由な表現の場がとれるであろう。

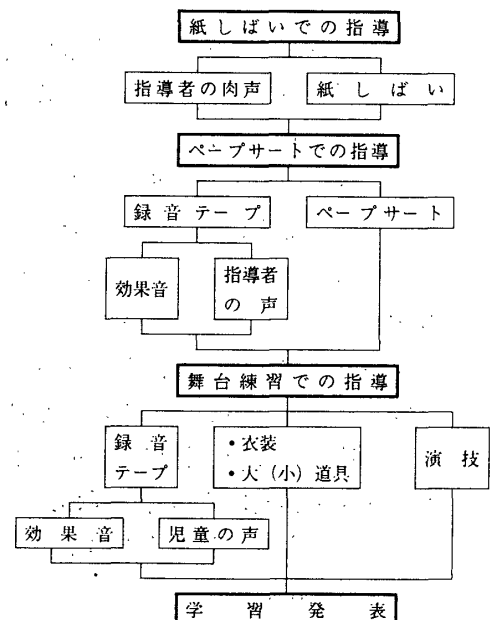
(4) クリスマス会の当日にむけて、昨年度の劇のビデオ、今年度の劇の練習のビデオの視聴、クリスマス会のお知らせづくりと配布の活動をする。

ビデオの視聴を継続することでクラスの雰囲気も盛り上がりやすく、クリスマス会のお知らせの配布で、多くの人から言葉をかけられる経験は、児童の活動意欲を持続させるだろう。

指導の流れは右図のように考えた。以下、実践したことを述べてみたい。

4 物語の学習（紙芝居・ペープサートでの指導）

物語の学習は、登場人物を知らせ、話のあらすじを理解させることを目標とした。使用したのは、紙芝居「かさじぞう」(NHKサービスセンター、日本昔話、文・石山 透、絵・奈良坂智子)であった。朝の会、帰りの会で視聴させることからあはじ



めた。使用する言葉は、物語を変えないように児童のわかりやすいものに変え、はじめから全部読み通さず、くり返して読むうちに終わりまで読むようにした。おさえておきたいポイントとして4つの場面を考えて、劇あそびを構成していった。第1場面では、本学級で1学期に学習したお茶を

第1場面	第2場面	第3場面	第4場面
売りにいく相談をする。	おじいさんとおばあさんが、かさを	おじいさんが、町に売りにいくが、	おじいさんが、おじぞうさんにかさを
	かさは売れずがっかりする。	をかぶせてかえる。	きて、みんな喜ぶ。
	おじいさんが、町に売りにいくが、		おじぞうさんがプレゼントをもつて

入れて飲むという設定を取り入れてみた。女兒⑬の得意なことでもあり、本物の湯のみと急須を使ったので、他の児童も楽しみながらできた。又、第3場面では、ダンボール製のかさ（これは劇中でも使用）を、おじいさんの役を交代しながら、全員にかぶせたり、頭の上に紙を切った雪をまいて、それを手ではらいながらかぶせる動作をした。児童には人気があり、「さむいでしょう」という台詞と動作が結びついていった。配役を決めるまでに、役を交代しながら劇あそびの場をつくっていったことで、他の児童の動作や台詞をまねていく雰囲気がつくられていった。

次に、登場人物の活動（どの場面に登場し、どんな動きをするか等）を理解することをねらって、大型のペープサートを製作し指導していった。このペープサートを利用して、配役を決定し、児童の自分の役への意識を高めようと考えていたので、学級の人数に合わせて、新しい登場人物を設定した。第1場面でお茶を入れる娘、第2場面でお客として登場する侍の2つの役である。これらは女兒⑬、女兒⑭が好むであろうと予想された。実習期間でもあり、実習生のペープサート劇が終わると、すぐに女兒⑬が「やりたい！」と発言し、スムーズに劇化の学習に入れた。又、予想どおり、女兒⑭、女兒⑬が役や演技内容を手がかりとして、自分で役を希望して決められた。ペープサートの裏に氏名を記入させることで、配役を定着させることができた。

5 劇化の学習（舞台での練習）

(1) 演技の手がかり

簡単な衣装をつけたり、小道具を使いながらの演技練習に入るわけであるが、演技の手がかりとして、次のようなものを用意した。

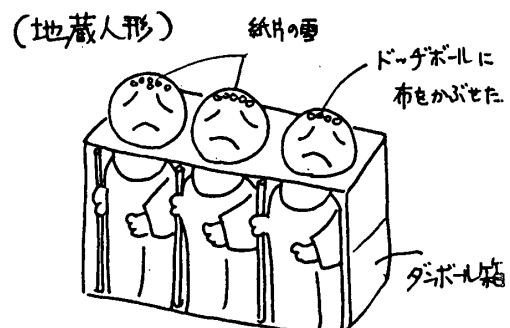
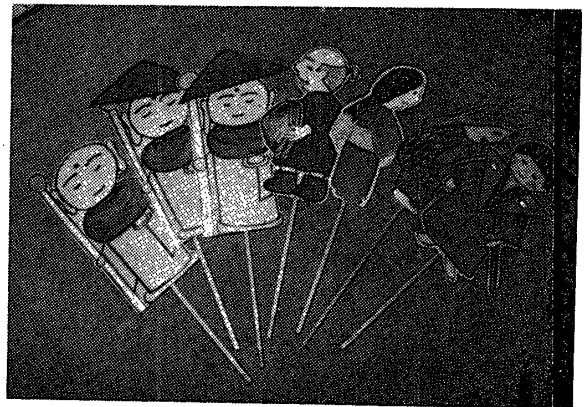
① 録音テープ

指導者の声による台詞、効果音を入れた録音テープを流しながら、まず、指導者が演技をして見せ、動作のタイミングをつかまえやすくする。後に、児童の声で録音したものに変えていったが、台詞も擬態語を入れて変えていった。その結果、最終シナリオと当日の演技用テープが完成した。次頁にシナリオの一部を示す。

② 大道具・小道具

大道具（家の柱、地藏人形など）は、登場人物の位置関係の理解を促し、演技する場所の目安となる。又、小道具（かさ、刀、湯のみなど）は、役への意識を高めるだけでなく、演技する時の手助けとなる。

第3場面の、おじいさんが地藏さんの雪をはらってかさをかぶせる演技では、地藏人形、かさが男児⑭の物語の理解を促し、動作の手助けになった。



子役	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	照明		音楽	効果音	衣裳
											O	F			
おぼろ			①②③④								O	F	ピアノ	効果音	和装
おぼろ		①②③④									O	F	ピアノ	効果音	和装
おぼろ			①②③④								O	F	ピアノ	効果音	和装
おぼろ			①②③④								O	F	ピアノ	効果音	和装



1986年度 豊後3級
クリスマス会
・おじいさん 6年④
・おばあさん 6年④・⑤
・むすめ 6年④
・おじいさん 1年④⑤⑥⑦
・おさむらい 8年④
・せいのこ スター 4年

- (2) 見せ場づくり
- ① 歌う場面を入れる

カラオケの好きな男児⑭が、第2場面で町に行くまでにマイクを持って歌う場面を設定した。流行していた「熱き心に」を選んだが、家に持ち帰らせたテープを何度も聞くので、ヘッドホンを着けさせられるほど気に入った。又、2学期、学級でよく歌った中から、「あの青い空のように」を劇の最後に歌った。どの児童にも好かれていた歌だったので、大きな声で歌えた。
- ② 踊りの場面を入れる。

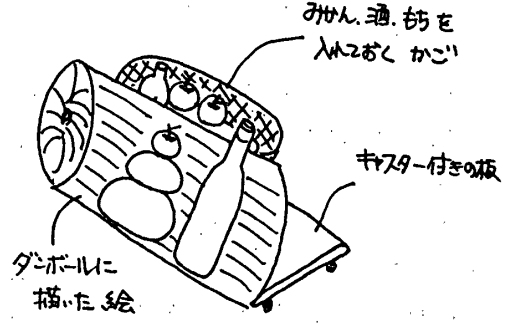
4人とも音楽を伴った踊りが好きなので、第4場面にお地蔵さん4人の踊りを設定した。曲は「艶姿涙娘」にした。指導者が考えた踊りを基本にしたが、女児⑬、女児⑮が考えた動きを賞賛して、踊りに取り入れていたので、踊りは当日まで変わり続けた。

又、踊っている児童の姿を浮かび上がらせるために衣装と照明に工夫をした。踊りの場面は、全体を暗くし、舞台下よりブラックライトで照らした。児童の衣装をブラックライトの光をよく反射する漂白した布で作ったので、暗い中に地蔵の動きを浮かび上がり効果的であった。



- ③ 協力して動作する場面を入れる。
- 舞台上で4人が協力して動作する場面として、第4場面の踊りのあと、プレゼントの相談をして、プレゼントの分担を決め運ぶ演技を入れた。

右図のような移動させやすい大道具を作製してみかん、酒、もちの小道具を取り出したり、運んだりする活動をしやすいようにした。女児⑬、女児⑮の2名が他の2名をリードするようになり、特に女児⑩が女児⑮の動きにつられて動いていけるようになった。



(3) 演技することの意欲の持続

クリスマス会に向けての学習期間は、大旨2週間である。劇づくりだけでなく、図画工作（帽子、かざりづくり等）音楽（合奏の発表、歌等）などの学習を同時に進めていくので、児童の目的意欲は持続しやすいと考えられる。写真は、歌「あわてんぼのサンタクロース」をもとに、クリスマス会のおしらせづくりをした時の導入部である。

演技することの意欲の持続を、次の2つの活動を用意することでねらってみた。



① 児童の出演する劇のビデオを視聴する。

男児⑭、女児⑬はテレビを見ることを好む。毎朝、昨年までのクリスマス会の劇のビデオを視聴することで、「げき、何するん?」と児童が尋ねるようになり、劇をすることへの意欲が喚起された。

② おしらせづくりをする。

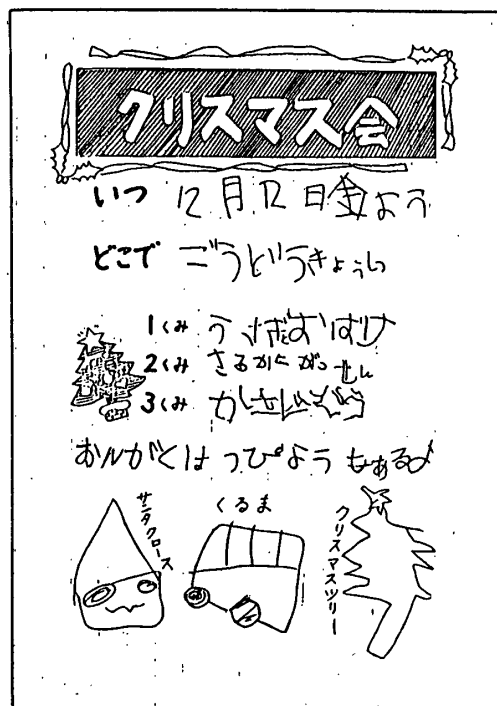
右のようなおしらせを作って、家に持ち帰らせたり全校の教室に配布してまわったりした。児童と話し合いながら書かせた原稿を編集し、簡易多色印刷器で印刷したものである。

おしらせづくりは、伝える必要感から出発することになるが、経験が十分に積み重なってない時には、伝える（配布してゆく）という具体的な経験から逆に伝えることの楽しさ、そして、もっと伝えたいという意欲を育てていくことも

大切であろう。おしらせを配布しながら、配役を質問に答えて話したり、演技の一部をして見せ、「見に行くよ!」と言葉をかけられたことは、演技することの意欲を高めたと思われる。

クリスマス会が近づくとも家庭でも話題になることが多く、連絡帳にもそのことがよく書かれる。

- 「これから、かさじぞうの劇をします」「おじいさんの役やる」「さむい、さむい」……と言います。(男児⑭の母親より)
- 練習すると言ってテープをかけ一生懸命踊っていました。お母さん金曜日に見に来てねと言うのです。本人ものすごくハッスルしています。(女児⑬の母親より)



6 演技発表（当日の様子）

女児⑬：前日から母親が見にくることを楽しみにしており、第1場面では、テープの台詞に合わせて、おじいさんとお茶を飲み、動作を交えて、送り出す時に挨拶ができた。

男児⑭：マイクを持って自信を持って歌えた。地蔵の頭の雪を残らないようにはらい、かさと手ぬぐいをかぶせた。会場から大きな拍手を得ることができた。

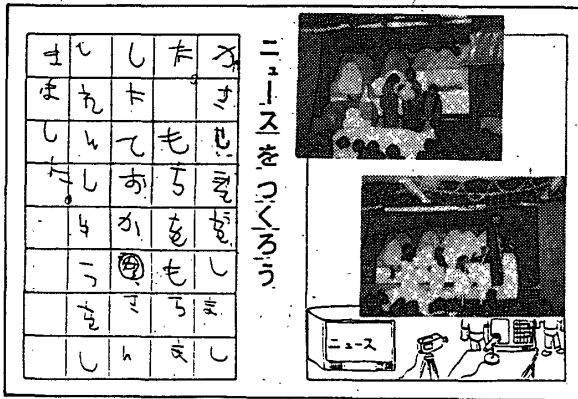
女児⑮：テープに合わせて登場し、かさを断る時に大きな動作で会場を沸かせた。プレゼントを決めて取り出す時に、他の児童をリードして配った。

女児⑯：テープの台詞に合わせて、お茶を入れてすすめることができた。第4場面では、女児⑮の動きをまねてプレゼントを取り出し見せるという演技ができた。

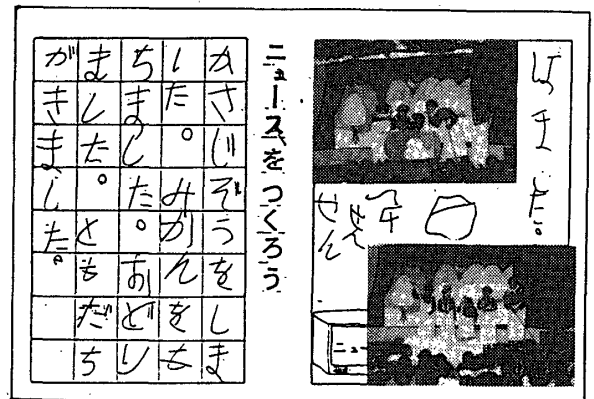
7 関連した指導（ニュースづくり）

本学級で継続して取組んでいることに、ニュースづくりがある。これは、自分の体験を話し、書いて伝えることを体験できるようにと考えて指導してきたものである。この中で書くことへの意欲を高めることができると考えている。くわしくは、初等教育35号を参照されたい。

クリスマス会後、冬休みをはさみ約1ヶ月後に書いてみた。ビデオ、写真を手がかりとして書いたが、ビデオを見ながら台詞を言ったり、写真の細かなところに気づいて発言したりし、クリスマス会が楽しい体験の場となっていたことを裏づけていた。



女児⑩



女児⑬

8 考察

(1) 物語の理解はどのように促され、劇中の演技につながったか。

紙芝居での学習と平行して劇あそびを取り入れたことで、劇あそびでの動作をそのまま劇中の演技としていったこともあり、楽しみながら、学習を続けられたと考える。女児⑩がお茶を入れるという演技をスムーズにできたことは、そのひとつと言える。又、実習期間であるということを生かし、実習生の演技（生の演技といえる）を見せたことは、演技することの意欲を高めた。特に女児⑬は、練習の始め頃は恥ずかしがっていたが、指導者の見本動作と一緒にし賞賛することで、台詞のテープに合わせて、おじいさんに呼びかける動作を自信を持ってすることができた。大・小道具の手がかりとしての効果は前述したとおりである。

(2) 楽しい表現の場づくりはできたか。

劇の中に取り入れた歌、踊りはその後学級の中での遊びとして定着してきている。踊ること、それは自己表現と言えるが、踊りをみんなでやりたがるというのは、楽しい表現の場となっていると言えよう。今後も学級経営の中に生かしていきたいと考えている。

(3) 演技をすることへの意欲を高め、持続させることができたか。

クリスマス会当日に近づくに従い、連絡帳に児童の家庭での様子が書かれることは前述したとおりであるが、前日の帰りの会で明日の予定を伝えた時のうれしそうな顔、当日自分たちの出番を「ねえ、まだ？」と何度もたずねてきた時の顔は、とても生き生きとしていた。改めて、劇を発表するという学習は、生活を生き生きとさせると感じた。この積み重ねが、次回の劇づくりの学習の際に、又、生きてくると思われる。